


ステパノの殉教の死を機に始まった教会に対する激しい迫害によって、使徒たち以外の弟子たちは、諸地方へと散らされて行きました。でも、ただ逃げたのではなく、彼らは、その先々で主イエスを証したのです。その中にピリポもいました。彼はサマリヤ人の町に下り、そこの人々に福音を語ったのです。すると、主を信じた人々が、男も女もバプテスマを受けます。そこにエルサレムから遣わされてきた使徒たち（ペテロとヨハネ）が、彼らのために祈り、手を置くことで、サマリヤ人たちにも聖霊が与えられたのです。

いかがでしょうか？もしあなたがピリポの立場なら、その後、どうしますか？特に、魔術師シモンのように、正しくない動機で信じた人もいたわけですから、その町の新しい信仰者たちのことを思うと、しばらくそこに留まりたいと願うのが自然ではないでしょうか？その後、ピリポがどのくらい滞在したのかはわかりません。でも、それとは違う計画が主にはあったのです。26節「ところが、主の使いがピリポに向かってこう言った。『立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。』（このガザは今、荒れ果てている）」。

 前の地図を見て下さい。ガザとは、エルサレムの南西、地中海沿岸に位置しますが、主の使いのこのことを聞いたピリポは、立って出かけていきます。そして、27-28節に書かれているように、そこでエチオピヤ人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピヤ人と出会うのです。彼は、礼拝のためエルサレムに上り、この時、帰る途中でした。馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいたのですが、その意味がわからずにいたのです。そこで御霊は「彼といっしょに行くように」と語り、ピリポはその通りにします。そして、そのイザヤ書の箇所から始めて、主イエスのことを彼に宣べ伝えるのです。

その結果、36節以降のことが続きます。36-38節「道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。『ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。』38節そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた」。

ここで一つ説明を加えておきます。というのは、この所では37節がないからです。理由はわかりません。ただ注解によると、異本には37節として次の内容が挿入されているとのことです。PPT「そこでピリポは言った。『もしあなたが心底から信じるならばよいのです。』すると彼は答えて言った。『私は、イエス・キリストが神の御子であると信じます』」と。宦官が自ら洗礼を受けようとしたところからして、彼が主イエスをキリストと信じた証拠と言えるので、この説はあえて挿入しなくても意味は通じると思います。

ということで、宦官が洗礼を受けるところまでは、特に問題は見ないと思います。ただ、その後不思議なことが起こるのです。39節「水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った」。主の霊が、どのようにしてピリポを連れ去ったのか、またどのタイミングで宦官は、彼を見なくなったのか詳細はわかりません。不思議としか言えないと思うのです。


私の考えでは、サマリヤ人同様、この宦官も洗礼を受けた後、主について教えられる必要があったということです。でも、主の考えは違いました。主は、ピリポをそこから連れ去られたのです。40節「それからピリポはアゾトに現れ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った」。アゾトとは、ガザの北方約30キロの所ですが、ピリポはそこに現れ、福音を宣べ伝えながら、さらに北のカイザリヤまで行きます。

ということは、ピリポをして、彼がガザに遣わされたのは、このエチオピヤの宦官に主イエスを証するためであったということが出来ます。主の使いは、彼を救いに導くために、わざわざピリポを遣わし、でも、彼がその役目を終えるとともに、彼を次の所へと移されたのです。このことを皆さんは、どう思われますか？たった一人のために、ピリポがサマリヤを後にし、ガザに行ったことは、果たして価値のあったことでしょうか？もちろん、価値はありました。一人の人が救われるなら、天では大きな喜びが起こるのです。

でも、ピリポにしてみると、彼が立って出かけるように言われた時、彼にはその理由が明らかにされていませんでした。主の使いは、ただ「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい」と言ったのです。もし、そこに彼の愛する人や家族が待っているとわかっていたなら、話はまだわかります。でも、そこで何が

あるのかはピリポは知らなかった。彼と宦官はこの時、初めて会ったのです。この世の感覚からしてそれが割りに合っているかということ、私にはそう思えません。むしろ、サマリヤに留まっていた方が、良かったのではないかとも思うのです。でも、主はその一人のため、エチオピアの宦官のために、ピリポを遣わされました。そして、御霊に満たされていたピリポは、その主の導きに従ったのです。

今私は「一人のため」とあえて強調しました。でもそれは、本当に宦官一人のためだけだったのでしょうか？ もちろん、彼は一人ではなく、そこには彼の付き人たちが何もいたことでしょう。その人たちはもちろん、彼のまわりには多くの人々がいたはずです。なぜなら、彼はエチオピアの女王の高官であって、女王の財産全部を管理していたほどの人物です。それほど高い地位にある人ですから、当然、彼のもとには多くのしもべたちがいて、彼の主への信仰は、彼らにも影響を与えたはずです。そして、その影響は、女王にまで及んでいてもおかしくないと思うのです。主は、そのことを当然ご存知で、ピリポを遣わされたのではないのでしょうか？

主イエスは、弟子たちに言われました。「聖霊があなたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」（使 1:8）。ここでの出来事も、この主のおことばの成就として見ることができます。ところで皆さんは、エチオピアがどこにあるかご存知ですか？ 前の地図を見て下さい。エチオピアは、東アフリカにあります。10年ほど前になりますが、2007年の国勢調査では、エチオピアのキリスト教徒は62.8%、続いてイスラム教徒が33.9%ということです。そして、キリスト教では、大多数がエチオピア正教会の信徒とされています。

一般的に、エチオピアにキリスト教が伝わったのは紀元4世紀頃と言われますが、だからといって、この宦官の影響が全くなかったとは言い切れないと思うのです。彼を通して、キリスト教信仰を受け入れる土壌がその地に築かれていたことからこそ、その地での伝道が進んだのも知れません。いずれにしても、主は、ご自分の民を知っておられます。誰がご自分の声に耳を傾け、従う者であるかを、主はご存知です。それゆえに、そのご自分の民のもとへ、聖霊の導きに従うご自分の弟子たちを遣わされます。この時のピリポのようによです。

ここで宦官が読んでいたイザヤ書のことばについて見てみましょう。32-33節「彼が読んでいた聖書の個所には、こう書いてあった。『ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。33 彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。』」。

これはイザヤ書 53 章 7-8 節からの引用ですが、ピリポは、この聖句から始めて、主イエスのことを宦官に宣べ伝えたとあります。ですから、53 章全体から主について説き明かしたのかも知れません。イザヤ書 53 章といえば、「イザヤがまるで十字架の下で書いたかのようなのである」と言われるほど、主イエスの十字架の情景をよく描いています。でもイザヤ自身は、主イエスよりも、七百年も前に活躍した預言者です。

ですから、ユダヤ教の改宗者と思われるこのエチオピアの宦官は、巡礼のためにエルサレムに来ていたわけですが、そこで主イエスの十字架の出来事についても耳にしていたと思います。ただ、そのことと、彼がこの時読んでいたイザヤ書の預言とはリンクしなかったのです。それゆえに、その預言された方が、ナザレのイエス、エルサレムで十字架にかかれた方であることを教えてもらう必要がありました。そこでピリポが遣わされたのです。

このところには、その預言された方が、ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、口を開かなかったとありますが、なぜ主イエスは、口を開かなかったのですか？ 主イエスはなぜ、卑しめられ、正しいさばきを取り上げられる中でも、黙ってそれを受けられたのでしょうか？ 主イエスのいのちは、そのようにして取り去られたのです。なぜ主は、口を開かず、黙って、十字架刑をその身に受けられたのですか？ イザヤ書の続きとところを見ます。

イザ 53:10-12 「しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は未長く、子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。11 彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、そ

の知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。12 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする」。

主が、ユダヤの指導者の不当なさばきの前に、口を開かず、ご自分を弁護せずに、その卑しめを受けて死なれた理由、それは、ご自分のいのちを罪過のためのいけにえとすることで、私たちの咎を主がになって下さるためです。そのようにして、ご自分が砕かれ、痛められることで、私たち罪人に対する神のさばきが赦しへと、滅びが永遠のいのちへと変えられるためです。主は、そのようにして私たちの代わりとなり、私たちのためにとりなしをするために、ご自分のいのちが取り去られるのを良しとされました。

ピリポを通して、イザヤが預言した方と主イエスとがつながった時、宦官は、何のためらいもなく、主を救い主と信じて、バプテスマを受けたのです。そして、バプテスマを受けた後、もはやそこにはピリポの姿はありませんでした。でも、彼は喜びながら帰って行くのです。このような救いの出来事は、私たちが計画してできるものではありません。「主の御霊にピリポが従った結果である」ということは言えても、その他には、なかなか説明のつかないことです。

でも、主はそのようにして、ご自分の民を遣わさます。まだ救いにあずかっていないご自分の民を救いへと導かれるためです。そして、私たちはみな、その主の救いのご計画の中に含まれています。あなたは、自分ひとりが主によって新しくされることで、その考えや生き方が変えられたとしても、まわりに大した変化は及ぼせないと考えておられるかも知れません。でも、ピリポがそうであったように、一人の人が、主の救いにあずかり、御霊に導かれて歩むなら、その人を通して主の救いのわざは起こるのです。神の御子イエスは、そのために来て下さいました。

今日あなたは、主イエスが神のあり方を捨てて、人となり、この世に来て、私たち罪人のために十字架にかかり、ご自分のいのちを捨てられたことを当然のことと言われますか？罪の全くない方、神のさばきを受ける必要のない方が、私たち罪人の代わりとなることで、父なる神様から容赦なくさばかれ、捨てられたことを、「救い主なんだから、それくらいして当然」と言われるのでしょうか？それは割に合ったことですか？主はご自分がいのちを捨てることをしてまで、どんな人でも救われる道を備えて下さった方です。その主が、ご自分の民を救うために、すでに救いにあずかった者たちを遣わされるのは当然のことです。主は今日も、ピリポのように、ご自分のみことばに聞き、御霊の導きに従う者を求めておられます。あなたはその人ですか？